

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	永見 和子
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;"> 中華民国初期の社会思想と社会運動の興隆 ——青年知識人の中国社会批判を中心として—— </p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="margin-left: 40px;"> 主 査 教授 水羽 信男 審査委員 教授 丸田 孝志 審査委員 教授 小川 泰生 </p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>今日の中国に民主化の可能性はあるのか、という極めて現実的な問いを根底におきながら、近代中国において1910年代半ばから20年代にかけて展開された「新文化運動」について、学界では様々な角度から議論が行われている。それは「新文化運動」が、近代中国に新たな学知と政治的意識を作りだした、と考えられるからであり、こうした傾向は中国語圏だけでなく、英語圏でも見られ、当然、日本の学界でも国際的な知の交流を踏まえて、議論が深化している。こうした新しい研究潮流のなかで、1919年の「五四運動」と「新文化運動」を一体のものとして見なし、そのなかで中国共産党が生まれ、1949年の中華人民共和国の成立を導いたとする、かつての「正統史観」は克服された。</p> <p>如上の日本・中国・米国の研究史を永見論文は精査し、自己の研究課題を確定した。すなわちA) 従来の研究史で主として取り上げられてきた陳独秀や胡適など「新文化運動」の指導者ではなく、彼らの学生にあたる傅斯年ら若い世代の知識人の思想と行動とに着目し、B) 彼らの中国社会に対する理解のありようを実証的に明らかにすることを目指したのである。それはa) 若き知識人の思想的営為も、それに先立つ世代と同様に、その後、重要な意味を持ったにも関わらず、従来、その役割に相応しい研究の蓄積が無かったからである。また b) 新文化運動の思想史上における最大の意義は、最新の研究が明らかにするように、「社会」に関心を寄せ始めたことであったが、従来の研究では当時の中国社会論と社会変革論を、個々の知識人に即して具体的かつ十分に分析してこなかったからでもある。</p> <p>永見論文は具体的には、第1部「民国初期の社会観と社会改革論の誕生」で、20世紀初頭の中国における社会の発見の過程をまとめ、そのうえで英国留学後、中国の学术界を背負うことになる傅斯年の1910年代半ばから1920年代の思想を跡付けた。続いて第2部「社会運動の興隆——五四運動後の青年の思想と行動」では、「新文化運動」時期に最も注目された団体・「少年中国学会」と、その若き指導者・王光祈をとりあげ、彼らの社会論と社会改革論について論じた。さらに後に中国共産党員となり革命に殉じた恽代英が、マルクス・レーニン主義を選択する以前に示した豊かな可能性について、「少年中国学会」や王光祈との関係のなかで論じている。永見論文はこうした分析を踏まえて、最後に傅斯年の1940年代の議論なども踏まえて、</p>			

1910年代半ばから20年代の思想運動の歴史的意味は、彼らが社会に対する責任感を育んだことにあるとみなして、それを国民形成の視点から高く評価した。

永見論文には中国の伝統思想の影響力の強さについての理解や、当時の知識人たちの行動・運動がかかえた限界についての評価などの点に、今後の課題も残されている。しかし審査員一同、最新の研究成果を精力的に消化し自らのものとして、中国社会論と社会改革論の分析という課題を見だし、②いまだ本格的な研究が進められていない若き知識人とその団体に着目するという点において、永見論文がオリジナリティをもっていることを評価した。また考察の結果、③傅斯年や惲代英ら、1910年代から20年代の文化運動のなかで、中国社会を極めて理知的に分析し、変革運動に責任を持とうとした一群の知識層が形成されたことを極めて説得的に描きだした点も、審査員一同、特筆すべきだと考えた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。